



沖合底びき網漁業におけるアカムツ若齢魚保護の取り組み

島根県水産技術センター 専門研究員 道根 淳^{あつし}

はじめに

アカムツは、「のどぐろ」という名のほうが世間一般には馴染み深く、今や「白身のトロ」として全国各地で人気の高い高級魚となっています(図1)。島根県では、大型～中型サイズを「のどぐろ」、小型サイズを「めきん」、「めっきん」と呼び、大型のものであれば浜値で1尾が5,000円以上になることもあります。一方、小型サイズのものうち、一番小さい豆サイズは1箱(20kg前後)が1,500～2,000円前後、1尾当たり1～3円前後の安価で取引されています。この魚は若齢期の成長が比較的速く、サイズが大きくなれば価格も一気にアップすることから、小型サイズのを半年もしくは一年獲り控えて保護することで、水揚げ金額も大幅に増加することが期待されます。

そこで、現在、島根県水産技術センターと三重大学、東京農業大学、島根県機船底曳網漁業連合会とで共同実施している「禁漁区を機動的に設置してアカムツ若齢魚を保護する取り組み」について紹介します。



図1 アカムツ「のどぐろ」

どうやって保護するの？

地元沖合底びき網漁船の協力のもと、漁船ごとに操業場所、各操業時の漁獲情報の収集、ならびに一部の漁船にはリアルタイムに漁業情報が収集できる機器(商品名: RealMC 株式会社環境シミュレーション研究所)を取り付け、航跡記録、アカムツの漁獲情報の収集を行っています。これらの情報をもとに、アカムツ若齢魚の分布の多い海域を把握し、そのうち前の航海でアカムツ若齢魚が基準箱数以上獲れた操業の航路上に該当する全ての小小漁区(3分20秒升目)を当該航海で禁漁区とし、アカムツ若齢魚の漁獲を抑制します(図2)。このように禁漁区は最新の漁獲情報をもとに設け、禁漁とする場所を随時変化させていくことで、保護効果を高めるような工夫を行っています。

アカムツ若齢魚保護の取り組み

漁船による試験を行う前に、過去の漁獲情報を用いて、前航海でアカムツ若齢魚の

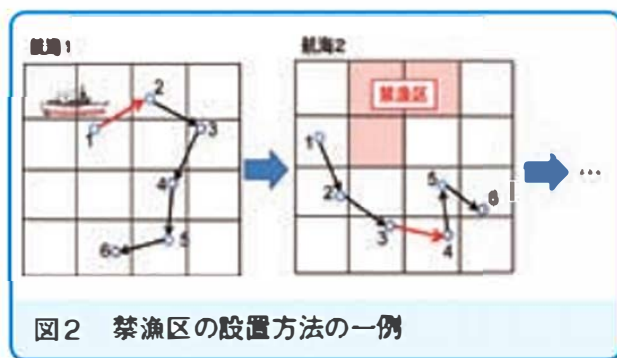
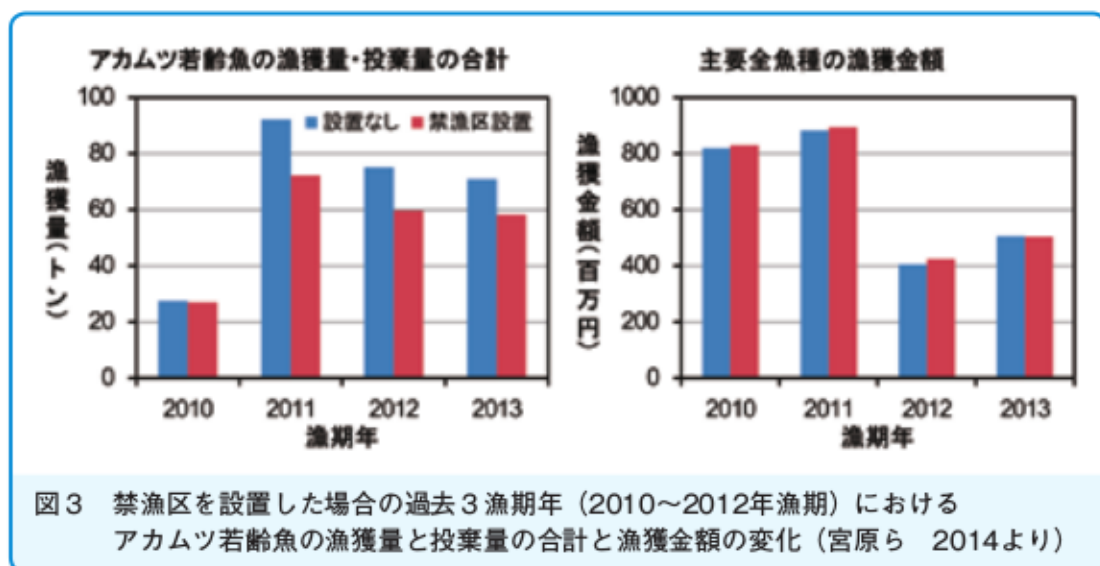


図2 禁漁区の設置方法の一例

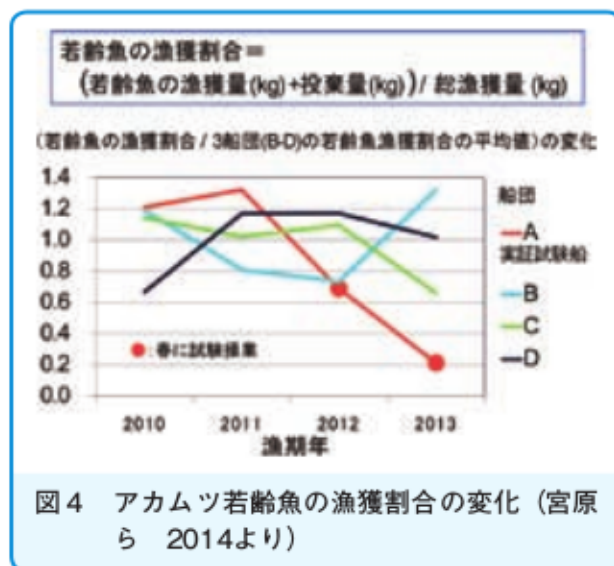


漁獲と投棄が3箱以上あった操業航路に該当する全ての小小漁区を禁漁区とした場合の、漁獲量と水揚げ金額の変化をシミュレーションにより予測してみました。その結果、禁漁区を設置した場合、主要全魚種の漁獲量、漁獲金額に大きな影響を与えることなく、アカムツ若齢魚の漁獲量を最大で2割減少させることが可能と推定されました（図3）¹⁾。

そこで、操業船による実証試験を2013、2014年漁期春季（4～5月）に実施しました。図4に示したように、実証試験船のアカムツ若齢魚の漁獲割合は、禁漁区設置前の2010、2011年漁期には他船に比べて高い状態でした。しかし、禁漁区を設置した2012、2013年漁期にはアカムツ若齢魚の漁獲割合は大きく減少し、他船に比べても漁獲割合が低下したことから、実操業においても機動的に禁漁区を設置することによるアカムツ若齢魚の保護効果が確認されました¹⁾。

今後、現場普及に向けて、複数船団でアカムツ若齢魚保護の取り組みを行う場合の、禁漁区設置期間や禁漁区範囲、禁漁区

設置の基準など、より効果的な管理方法を検討するとともに、禁漁区を設置する際にアカムツ若齢魚の分布予測システムを組み合わせる手法についても開発を進めています。これにより、将来的には単価の高いアカムツ大型魚の漁獲増加と水揚げ金額の増加を目指しています。



※本研究の一部は農林水産業・食品産業科学技術推進事業により実施した

- 1) 宮原寿恵・原田泰志・井上誠章・金岩稔・高澤拓哉・道根淳・沖野晃・村山達朗：鳥根県沖合底びき網漁業における機動的禁漁区の設置によるアカムツ若齢魚の資源保護効果の検討。平成26年度日本水産学会秋季大会。2014。